



世能  
多識編

上

多識





菊香鏡のりやの里れ御公本少て  
 か〜いおまう〜校ニヤよしも各結  
 の宿本をいさたり所を共〜ゆん  
 て御所多御御〜ら〜事〜と〜り〜出て  
 出まう〜序と〜み〜くた〜と〜ら〜と〜い。  
 以〜と〜わ〜と〜の〜ぬ〜ら〜て〜み〜ら  
 と〜祈の〜を〜の〜の〜守〜を〜や〜を  
 本や〜の〜と〜あ〜ま〜〜事〜あ〜は〜て〜也の



あやうらとたしのかむるよとの名を  
はさひひのまら記のせしちりのあや  
おとねえ人の多海のとくしとてさうね  
つねのまらちのあやひのちのね  
しやまねのしと書けふしねにおあ  
とて何やまはるさといふとまら記  
おとねのあはむひのそくしとてあ  
しおりのしあはるはのまらと何ま

あやのまらと何やまらとてまら記の  
糸呼をとりたる人あはれこのあつこひを  
漢字書いてふとてれあはるはあはる  
あやまら人のまひのあはるまらあ  
あやまらまらまらとてあはるまらあ  
まらまらまらまらとてあはるまらあ  
あやまらまらまらとてあはるまらあ  
あやまらまらまらとてあはるまらあ

形すす記考とあるは是よりなる  
ら舞とわりのとぬみのく人此  
をららるとせ及そのなけそらと  
いありととふ百十をを新あり月和  
三百をくそららの新初よりく書はく

九例

一 此集の起るやりと集録を起すのりともあり次  
作 豊南嶺あり、造次あり胸あり思ひ書を起すを  
盤 特り癖のやありとあきい問尋れ候く筆記中  
耳底記小習ふべくもあらぬと某年某月某日  
某益某夜某遊某時と記し一巻ぬく編集す  
に乃んく某年月日と去く見ら奉比便初を  
思ふあり部類と分ち出せ奉  
一 忘る事れられぬや筆記せしにせられき年の  
かきお記すに再い問くその重記小しるあり

前小答の所粗くし事後小答も無精あるあり  
或ハ前答細くして後答粗く事何れ等と  
其精細ある状等て多識の一助とすされ別名  
和名方言にせりて態多なり其のあれど筆記の  
儘く等て削らる事とあり師此強記より出る  
されハ去るに思ひは

一 造次顛沛のまにに問尋まらる此等記引書ホ  
らく正しく書成しとありされは物産の書  
等と我輩此跡き而あれハその怪よぶしね  
一 又これハあが臆説されハ人に語る處うくはと戒め

あつりてはさどせめらち一二と止事とほす  
しと記しゆぬされハあく心く面白き中  
思へらうあに其教のいせはふ朽人奉とあけ  
きて罪とせむあり

一 拍の競く七拍十三拍此を省り或ハ伊勢貞丈の  
筆記く從ふべしとて是非成らんされハ深き  
こゝろあつやと尋ね七拍の略は得るまじ  
然降く應しとありて省きぬ

一 器賦歎畜此類俳話等筆記するものあり  
とてどもいさぐ授合しといぬりてされハ

しぬ追て後編の采<sup>キヨ</sup>手とちりひべー

上之巻

目録

草之部

かきほがら  
わりのと  
あぢきい  
あぢきい  
はくく  
わくづき

やまゆき附き  
すき  
あぢき  
げんぢぢ附き  
みぐは  
あぢ  
あぢだり

あきぢか

やぶぐほ

あやぐ

むぐら

木之部

樗附つぎ

柏附ひろてあし

虫之部

蟻附ころきい

水馬附まじり

ひるがは

あやぐほの胡魚

てぎ附木てぎ

とろてんま

楓もぎ

木曾の椽

今云きりぐん

いやご

はあま

下之巻

目録

鳥之部

閑子鳥附つどり

翡翠羽翠

鴨鳧

梟

鷓鴣

鴛鴦

鴨

木兔

水鶏

よーきり

鶯

百舌鳥

都鳥

附鳥の字

鷓村鳥

魚介之部

鯛

かじう 附こり河鹿

鮎鱒

鰒

あまこ

雲雀

鶺鴒

鳴

鯉魚

鯪

鱒

鯪

海月

江鮭

辛燥者

鰒鱒

章魚壺

白魚

魴

附水魚 細代

海老

江鮒

附こり

蛸

鯖

鯊

鰩



俳諧多識編上

天谿樺柯先生口授

不溢居杉二  
無隱巢樺馨  
今筆記

問杜若トシダとかきつゝと訓シむらゝき也

答カかきつゝと古コく訓シ来キれと杜若トシダとよりのハ

高良姜カウカウ山姜シヤンカウやと一類イチルイ中チウとスミサと異コトある

との之ノされハ皆ミナる色イロも白シロひある州シウ之花ハナ也

葉ハも大ダイ低テイ拙チエより少コつり遠トウひある山ヤマ草クサに

しゝスイリウ草カウ也ヤハ何ナニも伊イ豆豆り三ミ宅ヤク海ウミ中チウ玉タマ俗ゾク

おがねんむと云々仲是ぬり通次八丈より海にて  
藝園家少て青のへ海をけらんりふらまたけ  
らんりふらふは六莖よあうみなり是は良姜之  
也れふぬぬ莖くあうみちくまきぬ志らり也  
かきつとこと寄之はぬぬの之是は授ありて  
誤ちのぬぬくり唐詩子客與泛舟杜若間  
ト云句あり見ホより謬来ると覺たり秋詩の  
杜若ハ何りの之哉かきつとぬぬの燕子花といふ  
是あり今適燕子花と俳書に用ゆる人もあり  
通用さくあすぬぬ正字をぬぬと云へ

問 款冬と山吹と刻するや

答 款冬花と山吹く月ひ来まする事久しは昔遠ひ  
ハ誰くも知る事少く頃が和名抄くやあふまこと  
和名はけしより誤るるといふれがさには何れに  
順ふぬ者ぐいうちまはしてあてまつるぬ山吹と  
落とせり遠へて和名と下まぐまや是は薬  
州ちまは山中自生のりれとすしにけり  
やまのあきとらふを後人此を遠へて山吹之  
と云ふるハ粗漏ちるし文字やしくは款冬ト書  
て者さく小莖と出し早春小至く満開

して初く書き飛之されば我部ハ又孝以て  
書たり史を三月よりのりて樹く我部  
山吹ハ方ひなる遠ひ也山吹の漢名を  
棣棠花也 問志ハ落ハ葉ハ冬  
よ用ゆハ也 若路の花を貴味なるハ  
冬と専ハせんハ冬葉然るべし  
昌貴の音ハ冬ハ倍れ耳目を喜ハする  
小春與あはハ至極のり有るハ季冬初春  
ハ流るのり定めてハ我部ハ古来俳書  
ハ皆春事ハ用ゆされどハけハ我部ハ

荻ハ冬と有るハ冬葉なり

問 藜蘆と古より我部ハ如何

答 藜蘆と古より我部ハ如何  
醫者何のり我部ハ用ひ事なるハ人令  
よハるハ我部ハ戒む下ハ其源を  
文音ハ起る事ハ藜蘆ハ毒物ハ  
吐劑也我部ハ用ひてハ害と有るハ  
是ハ又藜蘆の切を以テ藜蘆ハ和名  
日光蘭と云り之を以テハ漢名萬年青と  
ハ我部ハ用ひてハ必すハ此物と

賞玩アツまじくしり萬年書と云と祝ニユまるとや  
或人アル黎蘆レイロの画エと小襖フスマと書カキ書クシよと頼タシまれ  
たり黎蘆レイロとらふもの如く成物ナリモノやと亭テイ子シ  
問トまじくあま日光蘭ニクワランとらふものごとく図ヅの  
ありきるとん毛モウと云ひて圖ヅを書カキたりて  
席セキつらぬきと夜ヨの縁ヅで徳トク考カンガウへ日ヒのふもは  
黎蘆レイロふあふぎら下ゲと本ホン州シュウの害ガイとあせ  
しとやとらり世俗セキヤクのうとらるとなるごとくといひ  
しとらり内ウチと待マテて帳トシよとらりやとらぬ果カと  
とらとあて有アルしと是コトハ知チりたるが邪ジャテふあり

問トすも小薄コハクの字ジを用ひ又芒マウの字ジを用ひたり  
まじく正テイ字ジとや  
答コタ芒マウの字ジ正テイ字ジの漢カン土ツとて芭バ蕉キョウとらふと薄ハクハ  
字ジ書シヨに木キと林リンと云イ草ソウと薄ハクとらふと何ナニバクサ  
ムラの事コトと芒マウ魚イサもとらむと何ナニバクサ一物イツブツとさきに  
あふぎらとすまじくと割ワとらふと芒マウの字ジを用ひ  
問トまじく又マタ三傳サンデンのすまじくを名ナ枚バイとらふと何ナニバ  
答コタく略リョクとすまじくも何ナニバクサとすまじく  
ちのとらふと羽ウとすまじくあふぎらと何ナニバクサあり  
尾ビとらふと何ナニバクサと何ナニバクサと何ナニバクサと何ナニバクサ

問 罌粟花とケシと刻む借く芥子の字を用  
如何

答 罌粟花ハ正字之又罌子粟又御米花云  
米囊花といふケシの花は事ハ罌子花と  
書てケシハ用由下佛ハ花と書るもの  
やれハ花のまゝと粟の字を替て只ケシとも  
ケシの花とも用由也一唯ケシと云て  
花ハハ向中ハ華てハ向中ハ罌子花  
と書とれハハ向中ハ華てハ向中ハ罌子花  
ハ向中ハ華てハ向中ハ罌子花ハ向中ハ華てハ向中ハ罌子花

罌子花ハ大ハ遠つるもの之ケシ粒とカラシ粒や  
大小の相遠アリ花ハ粒文の事之久ハキ邦俗  
此毎月ハハ見くられたもの借を大ニと知る也  
これハカイシとケシの音ちうきよりの借字然可考  
問 ウメトキ小梅燈の字と用由是果なき文字之  
答 俗字ある下漢名賽珊瑚と云の是なりされど

俗通六用いざ〜やうり梅と書てり〜と  
仮名よて虫魚〜又字書嫌ハ疑〜あれハ梅と  
疑ふ〜小義理と用ひて梅〜と書と訓を付  
〜のち本物よ〜つら  
〜のと夫〜疑ふ〜小似〜存と〜  
疑〜ふ〜色ハ梅〜書〜事  
信〜用〜に害〜食羹の  
松〜河豚〜梅〜梅の  
字と用ゆ〜字義よ通〜俗字と之  
〜文音の人此用い〜字よハある梅〜次

於古書よ〜ひたる所ある梅〜や可考  
かく了解〜梅梅の文よも用ひて  
瓶を〜又漢名落霜紅〜野菜博録  
に出る梅子

問紫陽花を何ぞと刻するらん

答俳書答是哉用ゆさん紫陽花ハ白居易  
始て名付たるものや〜紫花の桂を云々  
西湖志云招賢寺僧植桂香紫可愛郡守  
白公號紫陽花白氏文集紫陽花詩并序  
りり曰招賢寺有山花一樹無人知名色

紫氣香芳麗可愛類仙物因以紫陽花  
名之何年植向仙壇上早晚移栽到梵家  
雖在人間人不識與君名作紫陽花とあり  
るる白氏より始なり名目あるより  
洵らうとあぢきよ大い異なりその花より  
あぢきよと刻せしやいも竹ぬ桂の花と  
草花と取違へる糸相千方のあぢきよハ  
秘傳花鏡に紫瑠珠といふのなりさ色は  
佛書小ハつて久々假名とて去ん奉をあらへ  
予う亭号とけ紫陽花より出て梅の異名と

用ひたるは是も紫師陽谷先生より賜る名と  
名子の紫陽と用ひたりハあぢきよ明末より清朝  
小いより桂と稱するハ今の木犀此事之本名ハ  
巖桂と云ふハ桂樹の花を木犀花といふあり  
謬あるものなるべし其後われ佛とあぢきよ  
ハ辨ずるよ及まじく天馬外邦と云ふはあぢきよの  
問ひんぞ田げんを花といふのまじんを菜と因お  
ありや  
谷敷内とてげんぞ花と云ふ江戸にてねんげ子と云  
流花とて室障花と云ふは谷敷内の花と言あり

俳<sup>ハ</sup>ら<sup>ン</sup>げ<sup>ト</sup>ま<sup>ヒ</sup>て<sup>キ</sup>ん<sup>ゲ</sup>と<sup>キ</sup>の<sup>ハ</sup>漢<sup>名</sup>ハ  
救<sup>キ</sup>荒<sup>ク</sup>野<sup>ヤ</sup>譜<sup>フ</sup>の<sup>ハ</sup>碎<sup>スイ</sup>米<sup>メ</sup>齋<sup>サイ</sup>と<sup>キ</sup>の<sup>ハ</sup>先<sup>セン</sup>輩<sup>ハイ</sup>  
何<sup>ナニ</sup>て<sup>ラ</sup>れ<sup>ル</sup>り<sup>ヤ</sup>和<sup>ワ</sup>板<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>圖<sup>ツ</sup>の<sup>ハ</sup>當<sup>ア</sup>り<sup>の</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>キ</sup>  
と<sup>モ</sup>唐<sup>トウ</sup>本<sup>ホン</sup>の<sup>ハ</sup>圖<sup>ツ</sup>ハ<sup>余</sup>程<sup>ホド</sup>遠<sup>トホ</sup>ひ<sup>の</sup>あ<sup>る</sup>て<sup>詳</sup>あ<sup>る</sup>次<sup>ツ</sup>  
外<sup>ソト</sup>に<sup>充</sup>ち<sup>り</sup>る<sup>あり</sup>と<sup>岩</sup>大<sup>ガン</sup>洲<sup>タイ</sup>ハ<sup>い</sup>れ<sup>る</sup>り<sup>蘭</sup>山<sup>サン</sup>  
翁<sup>ラウ</sup>ハ<sup>紫</sup>雲<sup>ウン</sup>英<sup>エイ</sup>と<sup>い</sup>て<sup>ま</sup>さ<sup>ら</sup>り<sup>是</sup>亦<sup>ウ</sup>ハ<sup>和</sup>名<sup>ワ</sup>雅<sup>カ</sup>稱<sup>セウ</sup>  
ま<sup>れ</sup>バ<sup>ヤ</sup>ら<sup>り</sup>げ<sup>と</sup>假<sup>カ</sup>名<sup>カ</sup>と<sup>判</sup>由<sup>ユ</sup>へ<sup>一</sup>或<sup>アル</sup>説<sup>セツ</sup>  
小<sup>コ</sup>古<sup>コ</sup>へ<sup>す</sup>れ<sup>と</sup>云<sup>ハ</sup>け<sup>ん</sup>の<sup>ハ</sup>事<sup>コト</sup>と<sup>い</sup>え<sup>り</sup>  
々<sup>々</sup>云<sup>ス</sup>す<sup>る</sup>ま<sup>は</sup>古<sup>コ</sup>へ<sup>壺</sup>す<sup>れ</sup>の<sup>ハ</sup>い<sup>り</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>キ</sup>と<sup>ト</sup>  
然<sup>シ</sup>可<sup>ベシ</sup>考<sup>カン</sup>壺<sup>カフ</sup>す<sup>る</sup>ハ<sup>董</sup>あり<sup>又</sup>董<sup>キン</sup>を<sup>菜</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>所</sup>  
長<sup>チ</sup>紫<sup>シ</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>ハ</sup>紫<sup>シ</sup>花<sup>カ</sup>地<sup>チ</sup>下<sup>カ</sup>と<sup>云</sup>り<sup>の</sup>ハ<sup>ま</sup>あ<sup>る</sup>り  
和<sup>ワ</sup>名<sup>ナ</sup>抄<sup>セウ</sup>不<sup>フ</sup>す<sup>れ</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>ハ</sup>紫<sup>シ</sup>花<sup>カ</sup>地<sup>チ</sup>下<sup>カ</sup>の<sup>ハ</sup>す<sup>れ</sup>  
なる<sup>事</sup>も<sup>久</sup>し<sup>ゆ</sup>の<sup>ハ</sup>事<sup>コト</sup>又<sup>又</sup>京<sup>キョウ</sup>都<sup>ト</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>ま<sup>に</sup>  
と<sup>い</sup>ふ<sup>ハ</sup>い<sup>り</sup>の<sup>ハ</sup>所<sup>トコロ</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>ハ</sup>い<sup>り</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>ま<sup>に</sup>  
是<sup>コ</sup>ハ<sup>俚</sup>俗<sup>リョク</sup>の<sup>ハ</sup>名<sup>ナ</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>ハ</sup>い<sup>り</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>ま<sup>に</sup>  
正<sup>タ</sup>し<sup>き</sup>和<sup>ワ</sup>名<sup>ナ</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>ハ</sup>い<sup>り</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>ま<sup>に</sup>  
問<sup>ト</sup>女<sup>メ</sup>郎<sup>ロウ</sup>花<sup>カ</sup>を<sup>い</sup>ふ<sup>ハ</sup>い<sup>り</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>ま<sup>に</sup>  
刻<sup>キ</sup>を<sup>正</sup>字<sup>ジ</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>ハ</sup>い<sup>り</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>ま<sup>に</sup>

答<sup>コタ</sup>萬<sup>マン</sup>葉<sup>エフ</sup>集<sup>シツ</sup>和<sup>ワ</sup>名<sup>ナ</sup>抄<sup>セウ</sup>古<sup>コ</sup>今<sup>イマ</sup>集<sup>シツ</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>ハ</sup>い<sup>り</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>ま<sup>に</sup>  
又<sup>又</sup>く<sup>く</sup>り<sup>り</sup>換<sup>カ</sup>ハ<sup>ハ</sup>す<sup>る</sup>不<sup>フ</sup>考<sup>コウ</sup>漢<sup>カン</sup>名<sup>ナ</sup>ハ<sup>敗</sup>醬<sup>シヤウ</sup>と<sup>い</sup>ふ<sup>ハ</sup>い<sup>り</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>ま</sup>ま<sup>に</sup>



りの元元曆本の萬葉集、娘部四と書  
けりさればとみみどりとへの字濁て讀へき  
關東とてハとみみめと云備あてをよみか  
へと云歌連保とよ女帝花の文字あり  
とてつて海をとりて作る事通何と云の花は  
白きりのを男身花と書ておとと一と割を  
是を和名抄に見くると又南樓花と書之  
又古名おととととり漢土の多女良花  
といふれハ木蓮花の一名なるを粧樓記り  
えくたあふ又女車花の謡小抄のとハむせるあへの

ことと云よと云あつとみぢよらとととと作  
りる有食餘而爲除粮と云事あつと音の因ド  
きふりとけけと除粮花と云義あり又保よとハ  
まるとつとけとととと一のりつと集集のちひ  
まハ歌まめとと人の事とけけととま

問蘭とて割と正字と也  
答正字とてり本州と菘と細織て席  
とあすとのまハ本名と地心子之和名わぐさ  
又おとむりもつと又わそのおと云是ハやと  
つと物と對して云詞あり備後席近江席と

皆新なるぐさを以て作りしもの也。楚心ハけ子のあう  
ごと用らるる事又馬蘭と云あり。和名孫ぢあや  
めらふ又孫ぢまらんなどとの中にて其のあや  
皆孫ぢられて生む花をあやめらふ。因て其  
名何事唯蘭と云ふものと混むべし。次菟ハ俗通  
アソヘラと云ふものなり。異國より席に織らるもの  
次持後本邦にも薩州にも多し。生むるは  
や東國のや。藝園あるはよく。盆植を  
とれあり。今燈子入るに作るものき皆席に  
織らるは。裁て梅も。

問 土筆と書てはらと刻ま正まや

答 倍字之漢名ハ筆頭菜と云ま。和漢ともに形  
状に似る。名は隋のもの。れハ相近き名なり。つ  
ぐ。雅名に古くつぐ。と云  
畧語や。東玉の俗稱也。歌小をつぐ。と  
係ま俳句ハ両根用ゆる事

問 正月儀に用ゆる齒乃おらるものハ正まや

答 正まふハあは。齒ハ齒と云ふものハ慶祝の文  
字之象ハ枝と云事。ハ用ひて長寿の草と云に  
似せ。と云ふの象白と云ハ。け州と云ふの白き

うりくろの信稱ち、架漢名ハ先輩拾遺草セツの  
りの子元アテらまゝに説セツあるは本州毒草類ルイの  
穂フダ多カ灰又ハ料の茎際クキウレシとて塗ヌリる如く光澤ツヤあ  
るを堅カタく著ハシしとて諸毒シヨドクを消クす言イヒ  
傳ツタふ見ミくより考カンれハ西域セイイキ聞見録ケンケンロク小出イダす集シウ  
吉草キツソクあるべくや曰集吉州イダシ勁直光潔ケツ極キクテ堅カタ  
綿マン屬リョク之不折ヘシ可カ作サス箸ハシと云集吉中フの名本邦フ也  
歳首慶品サイニシユ小用ケイゆらみ暗合アンゴウとて齒シ菜サイハ雅ガある文  
字ジやれハ用ヨウひて尤ユウふよりヨウら魚イサ但タく白ハク  
子時ハ仮名ヤマクサとて書カべ又山草ヤマクサと云ハ齒菜シサイの事コト也

問

答

鬼灯キトウと云ふはつぎと創クワシむ正字マサジ也  
出シツ石イシまゝに足アあアくク以ヨ本邦ホンポウの雅名ガ也ヤまマと  
救荒クウクワウ本草ホンソウにけし子の事コトと燈トウ籠ロウ見ミと云本經ホンキョウ逢ホウ  
原ゲンに掛金燈ケイキントウと云ハ時ハ鬼灯キトウの文字マも是コト也  
まマやヤのノいイまマとト雲クモの降フ時トキ分ワりリてハハまマの  
亮カ蟬セの羽ハのノまマとト筋スジ筋スジをヲりリて中ナカの紅アカキ  
美ミを透スカしシる時トキハ燈籠トウロウ此コノ如ノくク因ヨて名付ナツケ  
との之ノ神代卷カムヤマトにニかカらラとト云クハハけケりリとト云クはハまマのノ事コト也  
又マあアらラとト云ク又マあアらラとト云クはハまマのノ事コト也  
りリとト云クハハまマのノ事コト也

本州のこり言コトダマ靈レイと考まむ多説といふ  
ひへくや本草ニ酸漿サンニヤウと云本名之是ハ其の  
味アジノ衆名付アサるものぢや

問澤瀉タクシヤと云たうと訓を正字うや

答正字小あつに誤アなりされと用ひある事此  
事コトハ如何ともさぐらば沢瀉タクシヤと云るの葉品  
あつて和名さぐらたうと云るのあつても葉  
車前クルマゼンの葉のさぐらと云るの如サシ根塊カクり  
あり多タしれと薬用とあるものも水沢スイタクの  
く生ナむ奥列オクレツ仙臺センダイより出るものを真物マモノと云餘ヨリは

に自生ジセイするもの根至ネシて小くして輕ケイ虚キョちやあま  
本州ホンシュ原始ゲンシ小載コサイする所の水澤瀉スイタクシヤと云るの如サシ  
下品ゲヒンなりされバ沢瀉タクシヤと云るたうと訓コトはあつて  
おもたうハ東トウ医イ宝鑑ホウカンに野茨ノヒサキと云草花譜ソウカフの慈ジ荒アウ  
花クハと云るの是コレ之俗通ソコトウと月ツキいがらねハつと云ん  
假名カナは書カキん率ソツと云ふ也ナリ又按マツてはあまハ  
らるもの一姓イツセイありて花ハナの小コさきと云るのこらあハ  
咲サキり稀ヒ之ノおもたうハ豆マメあつて花ハナと咲サキりのちあま  
固カタて花ハナくらあつと云ふ又マタあつと云ふすいたくは  
あまど云イハ名ナあり振ヒ丹ニ吸ス田タ村ムラあつと云ふ種タネて



繪<sup>ナニ</sup>の<sup>ナニ</sup>けん<sup>ナニ</sup>不用<sup>ナニ</sup>の<sup>ナニ</sup>地<sup>ナニ</sup>を<sup>ナニ</sup>く<sup>ナニ</sup>して<sup>ナニ</sup>莖<sup>ナニ</sup>紫色<sup>ナニ</sup>なる<sup>ナニ</sup>物<sup>ナニ</sup>あり  
一<sup>ナニ</sup>名<sup>ナニ</sup>の<sup>ナニ</sup>あり<sup>ナニ</sup>たる<sup>ナニ</sup>魚<sup>ナニ</sup>び<sup>ナニ</sup>ある<sup>ナニ</sup>海<sup>ナニ</sup>たる<sup>ナニ</sup>ま<sup>ナニ</sup>ち<sup>ナニ</sup>を<sup>ナニ</sup>か<sup>ナニ</sup>つ<sup>ナニ</sup>づ<sup>ナニ</sup>  
ま<sup>ナニ</sup>ど<sup>ナニ</sup>國<sup>ナニ</sup>く<sup>ナニ</sup>わ<sup>ナニ</sup>り<sup>ナニ</sup>て<sup>ナニ</sup>種<sup>ナニ</sup>ま<sup>ナニ</sup>ら<sup>ナニ</sup>之<sup>ナニ</sup>藝<sup>ナニ</sup>園<sup>ナニ</sup>家<sup>ナニ</sup>あり<sup>ナニ</sup>ハ<sup>ナニ</sup>葵<sup>ナニ</sup>  
う<sup>ナニ</sup>う<sup>ナニ</sup>う<sup>ナニ</sup>云<sup>ナニ</sup>漢<sup>ナニ</sup>若<sup>ナニ</sup>ハ<sup>ナニ</sup>い<sup>ナニ</sup>ず<sup>ナニ</sup>不<sup>ナニ</sup>考<sup>ナニ</sup>夕<sup>ナニ</sup>鳥<sup>ナニ</sup>ハ<sup>ナニ</sup>漢<sup>ナニ</sup>名<sup>ナニ</sup>壺<sup>ナニ</sup>盧<sup>ナニ</sup>花<sup>ナニ</sup>  
なり<sup>ナニ</sup>古<sup>ナニ</sup>歌<sup>ナニ</sup>く<sup>ナニ</sup>す<sup>ナニ</sup>け<sup>ナニ</sup>む<sup>ナニ</sup>ぬ<sup>ナニ</sup>た<sup>ナニ</sup>ぞ<sup>ナニ</sup>か<sup>ナニ</sup>ま<sup>ナニ</sup>ぐ<sup>ナニ</sup>さ<sup>ナニ</sup>あ<sup>ナニ</sup>と<sup>ナニ</sup>云<sup>ナニ</sup>の<sup>ナニ</sup>  
皆<sup>ナニ</sup>夕<sup>ナニ</sup>歌<sup>ナニ</sup>の<sup>ナニ</sup>り<sup>ナニ</sup>す<sup>ナニ</sup>之<sup>ナニ</sup>志<sup>ナニ</sup>々<sup>ナニ</sup>々<sup>ナニ</sup>は<sup>ナニ</sup>云<sup>ナニ</sup>ハ<sup>ナニ</sup>そ<sup>ナニ</sup>等<sup>ナニ</sup>の<sup>ナニ</sup>名<sup>ナニ</sup>之<sup>ナニ</sup>元<sup>ナニ</sup>や<sup>ナニ</sup>  
壺<sup>ナニ</sup>詔<sup>ナニ</sup>々<sup>ナニ</sup>あ<sup>ナニ</sup>ん<sup>ナニ</sup>詔<sup>ナニ</sup>の<sup>ナニ</sup>世<sup>ナニ</sup>ハ<sup>ナニ</sup>皆<sup>ナニ</sup>白<sup>ナニ</sup>花<sup>ナニ</sup>なり<sup>ナニ</sup>て<sup>ナニ</sup>夕<sup>ナニ</sup>ア<sup>ナニ</sup>小<sup>ナニ</sup>字<sup>ナニ</sup>き<sup>ナニ</sup>  
物<sup>ナニ</sup>小<sup>ナニ</sup>葵<sup>ナニ</sup>故<sup>ナニ</sup>子<sup>ナニ</sup>總<sup>ナニ</sup>て<sup>ナニ</sup>あ<sup>ナニ</sup>ら<sup>ナニ</sup>ず<sup>ナニ</sup>海<sup>ナニ</sup>と<sup>ナニ</sup>呼<sup>ナニ</sup>品<sup>ナニ</sup>類<sup>ナニ</sup>多<sup>ナニ</sup>く<sup>ナニ</sup>  
乾<sup>ナニ</sup>瓢<sup>ナニ</sup>く<sup>ナニ</sup>ら<sup>ナニ</sup>る<sup>ナニ</sup>の<sup>ナニ</sup>だ<sup>ナニ</sup>め<sup>ナニ</sup>り<sup>ナニ</sup>は<sup>ナニ</sup>名<sup>ナニ</sup>々<sup>ナニ</sup>あ<sup>ナニ</sup>ら<sup>ナニ</sup>び<sup>ナニ</sup>と<sup>ナニ</sup>知<sup>ナニ</sup>る<sup>ナニ</sup>べ<sup>ナニ</sup>  
又<sup>ナニ</sup>干<sup>ナニ</sup>瓢<sup>ナニ</sup>の<sup>ナニ</sup>君<sup>ナニ</sup>と<sup>ナニ</sup>い<sup>ナニ</sup>ふ<sup>ナニ</sup>の<sup>ナニ</sup>旨<sup>ナニ</sup>是<sup>ナニ</sup>ハ<sup>ナニ</sup>越<sup>ナニ</sup>前<sup>ナニ</sup>敷<sup>ナニ</sup>賀<sup>ナニ</sup>の<sup>ナニ</sup>

ハカ言<sup>ナニ</sup>や<sup>ナニ</sup>て<sup>ナニ</sup>遊<sup>ナニ</sup>女<sup>ナニ</sup>の<sup>ナニ</sup>事<sup>ナニ</sup>と<sup>ナニ</sup>い<sup>ナニ</sup>ふ<sup>ナニ</sup>事<sup>ナニ</sup>や<sup>ナニ</sup>か<sup>ナニ</sup>類<sup>ナニ</sup>を<sup>ナニ</sup>い<sup>ナニ</sup>は<sup>ナニ</sup>る<sup>ナニ</sup>  
と<sup>ナニ</sup>云<sup>ナニ</sup>つ<sup>ナニ</sup>や<sup>ナニ</sup>俳<sup>ナニ</sup>と<sup>ナニ</sup>て<sup>ナニ</sup>用<sup>ナニ</sup>む<sup>ナニ</sup>の<sup>ナニ</sup>を<sup>ナニ</sup>終<sup>ナニ</sup>る<sup>ナニ</sup>て<sup>ナニ</sup>云<sup>ナニ</sup>ふ<sup>ナニ</sup>

問萬葉集の朝顔とらすの如何  
答万葉集の歌なり

朝<sup>ナニ</sup>庭<sup>ナニ</sup>ハ<sup>ナニ</sup>朝<sup>ナニ</sup>顔<sup>ナニ</sup>と<sup>ナニ</sup>て<sup>ナニ</sup>呼<sup>ナニ</sup>ぶ<sup>ナニ</sup>と<sup>ナニ</sup>い<sup>ナニ</sup>ふ<sup>ナニ</sup>歌<sup>ナニ</sup>ハ<sup>ナニ</sup>も<sup>ナニ</sup>呼<sup>ナニ</sup>ば<sup>ナニ</sup>ら<sup>ナニ</sup>り<sup>ナニ</sup>  
と<sup>ナニ</sup>ら<sup>ナニ</sup>ふ<sup>ナニ</sup>と<sup>ナニ</sup>い<sup>ナニ</sup>ふ<sup>ナニ</sup>の<sup>ナニ</sup>物<sup>ナニ</sup>類<sup>ナニ</sup>小<sup>ナニ</sup>な<sup>ナニ</sup>ら<sup>ナニ</sup>ず<sup>ナニ</sup>る<sup>ナニ</sup>事<sup>ナニ</sup>と<sup>ナニ</sup>い<sup>ナニ</sup>ふ<sup>ナニ</sup>  
又<sup>ナニ</sup>山<sup>ナニ</sup>上<sup>ナニ</sup>臣<sup>ナニ</sup>憶<sup>ナニ</sup>良<sup>ナニ</sup>く<sup>ナニ</sup>秋<sup>ナニ</sup>舞<sup>ナニ</sup>花<sup>ナニ</sup>と<sup>ナニ</sup>海<sup>ナニ</sup>也<sup>ナニ</sup>七<sup>ナニ</sup>種<sup>ナニ</sup>の<sup>ナニ</sup>書<sup>ナニ</sup>の<sup>ナニ</sup>ら<sup>ナニ</sup>は<sup>ナニ</sup>  
あ<sup>ナニ</sup>ら<sup>ナニ</sup>ず<sup>ナニ</sup>海<sup>ナニ</sup>の<sup>ナニ</sup>れ<sup>ナニ</sup>は<sup>ナニ</sup>是<sup>ナニ</sup>も<sup>ナニ</sup>く<sup>ナニ</sup>は<sup>ナニ</sup>朝<sup>ナニ</sup>顔<sup>ナニ</sup>と<sup>ナニ</sup>い<sup>ナニ</sup>ふ<sup>ナニ</sup>べ<sup>ナニ</sup>え<sup>ナニ</sup>は<sup>ナニ</sup>桂<sup>ナニ</sup>葉<sup>ナニ</sup>  
の<sup>ナニ</sup>三<sup>ナニ</sup>字<sup>ナニ</sup>と<sup>ナニ</sup>呼<sup>ナニ</sup>ぶ<sup>ナニ</sup>俳<sup>ナニ</sup>と<sup>ナニ</sup>い<sup>ナニ</sup>ふ<sup>ナニ</sup>事<sup>ナニ</sup>と<sup>ナニ</sup>い<sup>ナニ</sup>ふ<sup>ナニ</sup>刑<sup>ナニ</sup>と<sup>ナニ</sup>い<sup>ナニ</sup>ふ<sup>ナニ</sup>事<sup>ナニ</sup>と<sup>ナニ</sup>い<sup>ナニ</sup>ふ<sup>ナニ</sup>  
と<sup>ナニ</sup>ら<sup>ナニ</sup>は<sup>ナニ</sup>牽<sup>ナニ</sup>牛<sup>ナニ</sup>子<sup>ナニ</sup>の<sup>ナニ</sup>物<sup>ナニ</sup>類<sup>ナニ</sup>と<sup>ナニ</sup>い<sup>ナニ</sup>ふ<sup>ナニ</sup>事<sup>ナニ</sup>と<sup>ナニ</sup>い<sup>ナニ</sup>ふ<sup>ナニ</sup>事<sup>ナニ</sup>と<sup>ナニ</sup>い<sup>ナニ</sup>ふ<sup>ナニ</sup>朝<sup>ナニ</sup>開<sup>ナニ</sup>



非の音とあやまり〜〜〜て今ハ半と及る字之  
佛書と醫書ハ本音の古きハ傳く〜事来りと  
知る也〜又半成五ハ傳ハ異音に〜醫書其  
漢吳兩音と月ゆるなるハ〜人あれど其ハ  
あほり一切音義ハ音發之ハ漢吳同音  
あるに疑ハ〜是亦古〜に説と付る人あれど  
アハら〜佛元以來日本儒學業〜佛家  
ハ博識〜あり〜〜〜ハ亂世の以ハ  
音發漢吳兩音醫書に傳〜儒書ハ交色  
る事〜の也〜せんと今ハ龍〜音發の

正〜〜〜の也〜〜〜ハ〜ハ〜  
問 志やが〜のハ射干と書事正字〜志やん  
の音轉〜思ハ何〜  
答 漢音音轉〜思ハ〜  
〜の事〜古来枯〜射の音夜  
又神夜切因〜痘科鑿六麝乾〜出〜本  
叶方六夜干〜あり是ハ和名ハ〜云々之  
又切〜〜ハ漢名〜鳥扇の名あり  
和漢同名之志やがハ漢名蝴蝶草蝴蝶花と云  
りの是〜射干ハ丹花也志やがハ白花紫黒斑



何れをちのく異<sup>ユト</sup>なりけりけり俳<sup>ハ</sup>たあ<sup>ク</sup>胡<sup>コ</sup>蝶<sup>テ</sup>花<sup>カ</sup>の  
文字と用<sup>ヨウ</sup>めら<sup>レ</sup>のあり通用<sup>ツヨウ</sup>さ<sup>キ</sup>あ<sup>キ</sup>ハ正<sup>テイ</sup>字<sup>ジ</sup>あ<sup>キ</sup>ま<sup>シ</sup>を  
用<sup>ヨウ</sup>め<sup>ル</sup>一<sup>ニ</sup>又<sup>マタ</sup>鳥<sup>トリ</sup>尾<sup>ビ</sup>と書<sup>カ</sup>人<sup>ヒト</sup>あ<sup>キ</sup>を誤<sup>アヤマ</sup>之<sup>ノ</sup>鳥<sup>トリ</sup>尾<sup>ビ</sup>を  
和<sup>ワ</sup>名<sup>ナ</sup>のち<sup>チ</sup>も<sup>モ</sup>つ<sup>ツ</sup>る<sup>ル</sup>ま<sup>マ</sup>あり

同<sup>ドウ</sup>菽<sup>シク</sup>の<sup>ノ</sup>正<sup>テイ</sup>字<sup>ジ</sup>あ<sup>キ</sup>ま<sup>シ</sup>や

吾<sup>ガ</sup>本<sup>ホン</sup>邦<sup>ホウ</sup>の<sup>ノ</sup>倍<sup>ハイ</sup>字<sup>ジ</sup>なり<sup>キ</sup>れ<sup>ド</sup>漢<sup>カン</sup>も<sup>モ</sup>あ<sup>キ</sup>る<sup>ル</sup>字<sup>ジ</sup>あ<sup>キ</sup>て<sup>テ</sup>漢<sup>カン</sup>土<sup>ド</sup>  
少<sup>シ</sup>く<sup>ク</sup>ハ白<sup>ハク</sup>蒿<sup>カウ</sup>の<sup>ノ</sup>一<sup>ニ</sup>名<sup>ナ</sup>あり<sup>キ</sup>日本<sup>ニッポン</sup>を<sup>シテ</sup>種<sup>シュ</sup>野<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>考<sup>カウ</sup>と<sup>ス</sup>る<sup>ル</sup>  
花<sup>ハナ</sup>ハ<sup>ハ</sup>な<sup>ニ</sup>ぎ<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>ほ<sup>ホ</sup>き<sup>キ</sup>あ<sup>ア</sup>め<sup>メ</sup>の<sup>ノ</sup>あり<sup>キ</sup>と<sup>シ</sup>菽<sup>シク</sup>の<sup>ノ</sup>字<sup>ジ</sup>と<sup>シ</sup>製<sup>セイ</sup>衣<sup>イ</sup>也<sup>ニ</sup>  
琉<sup>リュウ</sup>球<sup>キウ</sup>國<sup>コク</sup>少<sup>シ</sup>て<sup>テ</sup>ハ<sup>ハ</sup>多<sup>タ</sup>く<sup>ク</sup>本<sup>ホン</sup>邦<sup>ホウ</sup>の<sup>ノ</sup>文<sup>モン</sup>字<sup>ジ</sup>と<sup>シ</sup>用<sup>ヨウ</sup>め<sup>ル</sup>物<sup>モノ</sup>名<sup>ナ</sup>天<sup>テン</sup>使<sup>シ</sup>  
相<sup>アヒ</sup>通<sup>ツウ</sup>も<sup>モ</sup>周<sup>シュウ</sup>煌<sup>コウ</sup>琉<sup>リュウ</sup>球<sup>キウ</sup>國<sup>コク</sup>史<sup>シ</sup>畧<sup>リヤク</sup>云<sup>ク</sup>菽<sup>シク</sup>技<sup>キ</sup>條<sup>ジョウ</sup>織<sup>シ</sup>弱<sup>ジュク</sup>如<sup>ニ</sup>柳<sup>リウ</sup>

小<sup>コ</sup>葉<sup>エフ</sup>如<sup>ニ</sup>榆<sup>ユ</sup>亦<sup>マタ</sup>作<sup>ス</sup>品<sup>ヒン</sup>字<sup>ジ</sup>九<sup>ク</sup>月<sup>ゲツ</sup>開<sup>カイ</sup>花<sup>カ</sup>葉<sup>エフ</sup>間<sup>カン</sup>遍<sup>ヘン</sup>滿<sup>マン</sup>紫<sup>シ</sup>艷<sup>エン</sup>如<sup>ニ</sup>區<sup>ク</sup>  
豆<sup>ツ</sup>花<sup>ハナ</sup>形<sup>ケイ</sup>と<sup>シ</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ル</sup>ハ<sup>ハ</sup>ま<sup>マ</sup>さ<sup>サ</sup>しく<sup>ク</sup>本<sup>ホン</sup>邦<sup>ホウ</sup>の<sup>ノ</sup>菽<sup>シク</sup>也<sup>ニ</sup>漢<sup>カン</sup>  
土<sup>ド</sup>の<sup>ノ</sup>菽<sup>シク</sup>と<sup>シ</sup>同<sup>ドウ</sup>名<sup>メイ</sup>異<sup>イ</sup>物<sup>モノ</sup>あり<sup>キ</sup>年<sup>ネン</sup>と<sup>シ</sup>天<sup>テン</sup>字<sup>ジ</sup>は<sup>ハ</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>シ</sup>是<sup>コト</sup>ハ  
此<sup>コノ</sup>文<sup>モン</sup>字<sup>ジ</sup>ハ<sup>ハ</sup>も<sup>モ</sup>琉<sup>リュウ</sup>球<sup>キウ</sup>一<sup>ニ</sup>と<sup>シ</sup>漢<sup>カン</sup>土<sup>ド</sup>も<sup>モ</sup>白<sup>ハク</sup>蒿<sup>カウ</sup>  
ハ<sup>ハ</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>シ</sup>知<sup>チ</sup>れ<sup>ド</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>シ</sup>き<sup>キ</sup>れ<sup>ド</sup>る<sup>ル</sup>と<sup>シ</sup>用<sup>ヨウ</sup>め<sup>ル</sup>ハ<sup>ハ</sup>ま<sup>マ</sup>  
害<sup>ガイ</sup>あり<sup>キ</sup>と<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>一<sup>ニ</sup>萬<sup>マン</sup>葉<sup>エフ</sup>集<sup>シツ</sup>ハ<sup>ハ</sup>芽<sup>ゲ</sup>子<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>書<sup>カ</sup>こ<sup>ト</sup>  
隙<sup>キツ</sup>名<sup>メイ</sup>ハ<sup>ハ</sup>胡<sup>コ</sup>枝<sup>シ</sup>花<sup>カ</sup>又<sup>マタ</sup>天<sup>テン</sup>竺<sup>ヂク</sup>花<sup>カ</sup>と<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>之<sup>ノ</sup>白<sup>ハク</sup>蒿<sup>カウ</sup>ハ<sup>ハ</sup>和<sup>ワ</sup>名<sup>メイ</sup>  
ぬ<sup>ヌ</sup>ま<sup>マ</sup>る<sup>ル</sup>も<sup>モ</sup>き<sup>キ</sup>又<sup>マタ</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ル</sup>も<sup>モ</sup>き<sup>キ</sup>と<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>州<sup>シュウ</sup>人<sup>ニン</sup>又<sup>マタ</sup>萬<sup>マン</sup>葉<sup>エフ</sup>集<sup>シツ</sup>  
ノ<sup>ノ</sup>宇<sup>ウ</sup>波<sup>ハ</sup>疑<sup>ギ</sup>又<sup>マタ</sup>免<sup>ケン</sup>牙<sup>ガ</sup>子<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>海<sup>カイ</sup>也<sup>ニ</sup>の<sup>ノ</sup>六<sup>ロク</sup>菽<sup>シク</sup>ハ<sup>ハ</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ル</sup>ハ<sup>ハ</sup>  
和<sup>ワ</sup>名<sup>メイ</sup>抄<sup>セウ</sup>小<sup>コ</sup>薺<sup>サイ</sup>蒿<sup>カウ</sup>和<sup>ワ</sup>名<sup>メイ</sup>於<sup>コ</sup>ハ<sup>ハ</sup>木<sup>キ</sup>と<sup>シ</sup>あ<sup>ア</sup>る<sup>ル</sup>の<sup>ノ</sup>一<sup>ニ</sup>日<sup>ニチ</sup>物<sup>モノ</sup>也<sup>ニ</sup>

う木の音通して時一ち分の之是ハナウのなき  
 ころよりのあまの氣江戸たによあやと移を裁  
 内の女言におもぎころもりあえ又あづまよりと  
 ひと説ゆれど非なりよあなにも云姓なりありそ  
 形ど一う違ひあり藤名と六月菊鐵幹蒿  
 鶏兒腸まどの遠ひあり、おもぎころりて小萩と  
 抑よ越うう小萩ハ俳ふことなきそ類むべし  
 歌一となきと讀まらるも木との夜名相遠何  
 こと知る感一

おもぎハ橘と  
 して春あり

問俳一律の省といふ歌ハ八重律ありといふは  
 小萩の草にや

答律ある律の省ハ八重律なりといふ皆同意  
 ありしより秋事みに用ゆるべき之隠逸の所  
 形容多く用ゆるや一其実を  
 考ううの世もともなきそかくは拂ひも  
 やぬお深くかくと合かく整りて  
 ちの小萩の通ひ路も果先おむらるる澄り  
 や窺ひの程あるさゆと一律の省ハ  
 つた十重草と小萩と一露のさゆと八重

薺サイと云ふの事一やして歌ハ文字多きゆへ  
そのもれを云イ、ツジふもそのありてハ薺サイ  
と云ふ事あるも其の事なれハ俳ハ  
薺サイの者として種情寂寞セキハクのさゆわら  
繁りハの落ハのさゆわら薺サイと云ふに  
薺サイりて言外ハのさゆわらしてハ薺サイ  
と云ふ事と云つてハ和味ハハ薺サイ今ハ喫茶家キツチヤカ  
の薺サイ薺サイと云ふの首ハの秋坪アキノヒラの如く  
小細コササの深フカきと云ふは薺サイと云ふハ  
内ウチを歌カきてうめと云ふは薺サイと云ふハ

薺サイの宿ヤドは後ノチやとりて薺サイの先達サキダチの工夫  
して名付ナツケしものよ新アタラシきさうりハ薺サイと云  
ふは春ハルの事コトを生ナして夏ナツにいりて蔓ツルを  
長ナガくクにむりて繁ハり合アひヒ綿ワタさう  
もさサにニあアるル深フカくク繁ハりハあアるルを  
いイんンと云トハ薺サイの宿ヤドと云トハ薺サイ草サウハ唐本  
草クサ出デてテ和名ワナむムと云トハ唐胡麻トウコマのノこノわ  
らラと云ト蔓ツル生ナるル葉ハ唐胡麻トウコマのノこノわ  
らラと云ト蔓ツル小細コササあるル刺トゲありて人の唐トウ  
と云ト

ききと路傍く多く生を傳り此之源頃以來  
若水篤信とハ和名むぐらとハ小松岡  
玄達いりぬる取違ひのや古よりむぐらと  
葎の事と云一奉懸り之葎ハ和名かかむ  
かきとらあせとられらるる以葎其徒及  
西湖翁あとも謬と執りてかかむぐらと  
多くとり予ハ頃々舊名と以て正しとす  
玄達又曰むぐらと云らるる稱まらむとの事  
麥田中か多く生を傳り此中へ救荒  
本艸か出せる猪殃々ありととり最も

あかやうりとの事一其猪殃々との事此ハ  
兒女の志とら孫とはと稱まらむとハ是を  
しむかかむぐらとらとの事ある説あり  
併しかかむぐらハ畧をけりかかむぐらとの事  
多しと云ふ事ありと云ふ事ありとの事  
むぐらとの事ハ葎草ハ意と同ト云ふ  
大州のむぐらとハ對してあかむぐらとハ別  
との事かかむぐら細くやりとらふたよきものを  
りしやかかむぐらの考へあれとら畧して口を関  
葎ハむぐらの本名と云ふ事あり又むぐらハ

むづろの意ありしりるの修精之又信  
りてしるるもむもの通精と知る也  
華の物さし霞あり案をいはさる  
その真を露の隠すぬにその居家墻垣の  
去あるれむむをかくれてはぬらふふね  
名あり又むづらせぬも通之和音にむ  
むづるもあつたもの物ありと知りあがら  
隠さるぬぬ之鼯鼠の和名をむづら  
りらとらむむづらしてはぬむと持上る  
りも義之又しるるありと云はるるも持上るの

縮信之うぐちちとつた又精なる信あり  
葎鼯の和名ムグラモグラと云て義を取所  
自他の違ひ有ても名同一も氏知るべし  
問心太と書くこころせん又いらぬぶと、字の  
らく州せらむや夕近來チカカ注家職人シヨクジンに  
と引て吉くしとてくと呼ぶや賣家アリキに  
りうとこあらんと精修しるるとし心太ハ  
俗字ゆて又くはやくらふ事い成也ありや  
すうまが  
各場マス并ナヒおはるはやくと云とあらんとしあむ



ふそくせんとあやまりつめて今ふらの真誠  
うしあけりされとこそありてんといふも二百年來  
り来りしりてんへて既く季吟の雨を  
今とて今とてんありてり世は清きりり  
多との干ふふりれを乾てんといふるなりと  
初多きしりける古風ゆき今を考ふへ  
古稱とて稱ふはゆいり違ふなりゆりて  
その真とて夫一亦多し一思想文を葩煎  
り歌今ハ流布せざれハゆふゆもとて  
いそり其趣とてうるゆりゆり

木之部

問 標<sup>フク</sup>といふのいふゆふありや五月の季に用ゆ  
ぬハ端<sup>タビ</sup>午<sup>ゴ</sup>の日<sup>ヒ</sup>佩<sup>ホ</sup>りのふすりゆふにゆりてりや  
答 志<sup>シ</sup>之<sup>ノ</sup>歳<sup>サイ</sup>時<sup>ジ</sup>記<sup>キ</sup>ホ<sup>ク</sup>詳<sup>ツバ</sup>なれはゆき云に及び  
されは漢<sup>カン</sup>ありし標<sup>フク</sup>といふゆふの歌俳ゆふ標<sup>フク</sup>ふ  
ゆふも和名ふありゆふゆふの倍<sup>ツク</sup>にちんだん  
ゆふ本<sup>ホ</sup>之<sup>ノ</sup>夏<sup>ナツ</sup>ゆふりて舊<sup>コ</sup>案<sup>アン</sup>の志<sup>シ</sup>を因<sup>ユ</sup>くゆふ花  
標<sup>フク</sup>といふ時<sup>トキ</sup>ハ夏<sup>ナツ</sup>季<sup>キ</sup>ゆふり本<sup>ホ</sup>名<sup>ナ</sup>ハ棟<sup>ツク</sup>之<sup>ノ</sup>標<sup>フク</sup>ありゆふ  
標<sup>フク</sup>ハ和名<sup>ワナ</sup>じんずいゆふ本<sup>ホ</sup>之<sup>ノ</sup>又<sup>マタ</sup>きり孫<sup>ソノ</sup>のちやかくる  
ゆふゆふありゆふ大<sup>オホ</sup>ゆふ異<sup>イ</sup>ありゆふ之<sup>ノ</sup>莊<sup>シヤウ</sup>子<sup>シ</sup>ゆふ









此を在る新編と云ふと云ふは、  
つとむすといふあり紅紫の全色なるも又黄紅  
まゝのまゝの編むるものなれば、  
モシハ 後撰集の序をみて、  
モシハ 此の書は、  
けしきよく、  
さる歌人の、  
此のみち、  
かひるま、  
しるべ、

上ノ世

されを意を、  
らるゝ又紅緒ハ、  
しるべ、  
既、  
と書、  
緒、  
諸兄公時代、  
黄葉、  
付、  
との、

白樂天<sup>ハクラク</sup>林間<sup>リンカン</sup>煖酒<sup>ニワカサケ</sup>焚紅葉<sup>ヒキアキハ</sup>又ハ社牧<sup>シャコク</sup>霜葉<sup>シラハ</sup>  
紅於<sup>ニハ</sup>二月<sup>ニハ</sup>花<sup>ハナ</sup>ちどりの類也又紫葉<sup>ムラサキハ</sup>菊<sup>キク</sup>のりみづ  
と書<sup>カ</sup>いころ哥<sup>カ</sup>何れどそれハ黃變<sup>ワウヘン</sup>と書<sup>カ</sup>てりまづ  
と訓<sup>ツク</sup>せり紅紫<sup>ベニムラサキ</sup>葉<sup>ハ</sup>のぬ名<sup>ナ</sup>をよりみちと訓  
しまふありづも色<sup>イロ</sup>づ多<sup>オホク</sup>紫<sup>ムラサキ</sup>のりみづと訓<sup>ツク</sup>入<sup>ハ</sup>  
紅<sup>ベニ</sup>信<sup>シン</sup>をりしつるの中古<sup>ナカコ</sup>以来<sup>イライ</sup>のりみづとくも  
紅<sup>ベニ</sup>とくねるゑと訓<sup>ツク</sup>す事<sup>コト</sup>ハ古<sup>コ</sup>へ紅<sup>ベニ</sup>花<sup>ハナ</sup>と書<sup>カ</sup>すより後  
せしと異<sup>ヒ</sup>紙<sup>シ</sup>くま<sup>マ</sup>と訓<sup>ツク</sup>きそのと濁<sup>ナ</sup>りは成<sup>ナ</sup>りあるといふ  
それのあゑといふ事<sup>コト</sup>とくねるゑといふてとるせしと漢<sup>カン</sup>土  
也<sup>ナリ</sup>も紅<sup>ベニ</sup>藍<sup>ラン</sup>といふてまうりつるて赤<sup>アカ</sup>き色<sup>イロ</sup>とくねるゑと

止ノ世ニ

事<sup>コト</sup>みありなる也

問<sup>ト</sup>柏<sup>ヒラキ</sup>とくを柏<sup>ヒラキ</sup>哉<sup>カ</sup>やかえあざと傍<sup>ナド</sup>て詠<sup>ヤミ</sup>く區<sup>マキ</sup>く之<sup>ノ</sup>  
又<sup>マタ</sup>柏<sup>ヒラキ</sup>ハ柏<sup>ヒラキ</sup>の俗<sup>ソク</sup>字<sup>ジ</sup>とも云<sup>イハ</sup>か<sup>ク</sup>をいふるとすれハ林<sup>リン</sup>あり  
但<sup>タ</sup>か<sup>ク</sup>をもとづりハ雜<sup>サハシ</sup>之<sup>ノ</sup>といふり貞<sup>セイ</sup>徳<sup>トク</sup>の詠<sup>ヤミ</sup>ハ柏<sup>ヒラキ</sup>も  
ハ復<sup>マタ</sup>之<sup>ノ</sup>とありされハ多<sup>オホク</sup>盤<sup>パン</sup>本<sup>ポン</sup>なりや

答<sup>コタヘ</sup>柏<sup>ヒラキ</sup>一名<sup>ナヒト</sup>掬<sup>ク</sup>柏<sup>ヒラキ</sup>ハ倍<sup>ヘイ</sup>字<sup>ジ</sup>之本<sup>ノ</sup>朝<sup>テウ</sup>といふ柏<sup>ヒラキ</sup>とくは法<sup>ホウ</sup>家<sup>カ</sup>  
和<sup>ニ</sup>松<sup>マツ</sup>柏<sup>ヒラキ</sup>之<sup>ノ</sup>後<sup>ノチ</sup>彫<sup>ネン</sup>とあはせ盤<sup>パン</sup>本<sup>ポン</sup>といふべしと廣<sup>ヒロ</sup>業<sup>ノク</sup>  
のあはれ事<sup>コト</sup>せりあはせくさる古<sup>コ</sup>今<sup>イマ</sup>雜<sup>サハシ</sup>の哥<sup>カ</sup>に  
心<sup>ココロ</sup>のよあるうろ小<sup>コ</sup>抄<sup>セウ</sup>といふか<sup>ク</sup>を本<sup>ホン</sup>のよとす  
まうに<sup>ニ</sup>は哥<sup>カ</sup>と家<sup>カ</sup>紙<sup>シ</sup>注<sup>チュウ</sup>云<sup>イハ</sup>柏<sup>ヒラキ</sup>ハ枯<sup>カ</sup>毎<sup>マイ</sup>葉<sup>エフ</sup>の枝<sup>エダ</sup>みづ

春まぐさぬのけなれは独もとのふきぬ物とそ  
らゑもふりされば袖中抄も孝望本に何れと  
見くゝ孝子とハ唐葉あつた事之夫木集也  
十五に宗長朝臣

夕時ぬやうゝさののりやうゝの葉わがら  
のみぢらゝにき孝子 孝も唐葉あつた事とハ  
同集小後徳大寺左大臣

ちゝきあゝよこみてかゝる唐経心との此種  
めでぎゝめやハ 壬二集中下江葉の哥 家隆  
長月の時あつたゝゝあゝあゝめてかゝること

ばきにりりやゝゝゝめてかゝるゝゝゝゝの違ひ  
て但唐葉標の鬼の手にあつたゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝ孝望本に拍六何ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝの川ゝゝゝゝかゝる孝望本に我ハかゝる  
万世まやに 顕昭注云とてかゝるゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝ拍六かゝる孝望本に孫と若ゝゝゝゝゝゝ  
れゝゝゝゝあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
千載集久ゝゝ部二頃徳院

吉野門意々ゝゝゝの初時ぬゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

爲體木のりかゝるもくくあり貞徳もやねり  
あひ松福の後彫あり考へ合せて柏のちるを  
夏あつとちり終るも子かや此を體木の教も  
及之也れと初然くお察して教めれあど  
各言抄のよむおびつぎしき柏まり 祇注の如き  
いふくは廣業標と定めし子但し 秋を松也  
いふくは得しふあり先かもなるもやこれ御  
古くありて柏といふも 或説くア之り 茂出  
し 赤りれありめかゝるも 一やんがハもかり昔ハ  
し 一やんがハ秋のみちりしとあひのちりれ、移りて

このあつめかゝるも 一やんがハ 一やんがハ 一やんがハ  
これと見も哥ふ、歌り 瀧久木のしりり  
むきしひやぎとつとて久しつあ甲ふりか  
あひあひの朝あゝ 一やんがハ 一やんがハ 一やんがハ  
の縁としりり 一首は安次しりり 一やんがハ 一やんがハ  
多し 一やんがハ 一やんがハ 一やんがハ 一やんがハ  
く 一やんがハ 一やんがハ 一やんがハ 一やんがハ  
名之とせ又古へ十部家とて 一やんがハ 一やんがハ  
はあひしりり 焼としりり 一やんがハ 一やんがハ  
し 一やんがハ 一やんがハ 一やんがハ 一やんがハ

の手拍とく分りのハハの樹のりやちりも勢  
 又按ヒき日本紀小膳臣連と書てかきこでは  
 びりり又ハかきこでりなをちりちり何と用ひり  
 されハ古ハ神膳ヲモノとて拍の系とかい受て来りり  
 りや神拳筆イり何せも是も赤葉柏アカハカシとへき  
 神クと拍シとて拍手シとて拍手シの積  
 何やありちりハク拍柏ハクの字の遠ハ拍ハとて  
 申之膳コトのコトとてハ異コトありりちり今  
 筑波山頂ツクハシの茶店とて白キ候と田アノと捨シとて  
 心ココロとて赤葉アカハカシのコトとて往古コトよりコトとて

言コト傳ツツハ是もちりちりや捨シとて拍ハとて  
 公コト氏シとてハハも用ひりちりちり古への拍  
 調料テウリウ庵アツとてハハ拍人ハクとて推オシて知チり  
 中古ナカコとてハハ歌ウタ及ツハ岳ツツ物モノとて正マサとてハハ  
 作シりシ作シ書シハ裁シりシされハ萬葉マンヤクの兒コの手テ拍  
 又マタ拍ハクとてハハ同ドウ名ナ二物ニモノとてハハ  
 又マタ角カク樹ジュとてハハ角カク樹ジュとてハハ一物イチモノとて  
 されハハ古コとてハハ違ヒガハとてハハ又マタ





くしてとらばはむらりゆりの和名抄の柏を  
之とすくはる面の見のまうとくは別名ある魚きれ  
ゆりともあまハ旁<sup>センサ</sup>鑿<sup>ナシ</sup>の臆<sup>ナシ</sup>説<sup>ナシ</sup>あがり<sup>ナシ</sup>檜<sup>ナシ</sup>と古<sup>ナシ</sup>より  
記のきと續めり柏の紫松の身<sup>ニキ</sup>あり<sup>ナシ</sup>檜ありと  
いふ説くもつて<sup>ナシ</sup>誤<sup>ナシ</sup>ク<sup>ナシ</sup>之の<sup>ナシ</sup>本<sup>ナシ</sup>といふ<sup>ナシ</sup>の<sup>ナシ</sup>片<sup>ナシ</sup>面<sup>ナシ</sup>  
ゆりて葉<sup>ナシ</sup>平<sup>ナシ</sup>は布<sup>ナシ</sup>て<sup>ナシ</sup>生<sup>ナシ</sup>まる<sup>ナシ</sup>とも<sup>ナシ</sup>の<sup>ナシ</sup>ま<sup>ナシ</sup>れ<sup>ナシ</sup>は<sup>ナシ</sup>扁<sup>ナシ</sup>柏<sup>ナシ</sup>  
す檜<sup>ナシ</sup>といふ<sup>ナシ</sup>あ<sup>ナシ</sup>実<sup>ナシ</sup>ハ<sup>ナシ</sup>柏<sup>ナシ</sup>を<sup>ナシ</sup>れ<sup>ナシ</sup>ハ<sup>ナシ</sup>和<sup>ナシ</sup>名<sup>ナシ</sup>より<sup>ナシ</sup>漢<sup>ナシ</sup>音<sup>ナシ</sup>して  
捨<sup>ナシ</sup>と<sup>ナシ</sup>呼<sup>ナシ</sup>ぶ<sup>ナシ</sup>を<sup>ナシ</sup>く<sup>ナシ</sup>い<sup>ナシ</sup>ふ<sup>ナシ</sup>と<sup>ナシ</sup>誤<sup>ナシ</sup>認<sup>ナシ</sup>す<sup>ナシ</sup>又<sup>ナシ</sup>か<sup>ナシ</sup>く<sup>ナシ</sup>と<sup>ナシ</sup>誤<sup>ナシ</sup>認<sup>ナシ</sup>す<sup>ナシ</sup>  
り此<sup>ナシ</sup>の<sup>ナシ</sup>く<sup>ナシ</sup>柏<sup>ナシ</sup>を<sup>ナシ</sup>か<sup>ナシ</sup>く<sup>ナシ</sup>とい<sup>ナシ</sup>ふ<sup>ナシ</sup>も<sup>ナシ</sup>ひ<sup>ナシ</sup>の<sup>ナシ</sup>か<sup>ナシ</sup>の<sup>ナシ</sup>り<sup>ナシ</sup>あり<sup>ナシ</sup>  
扁<sup>ナシ</sup>柏<sup>ナシ</sup>の<sup>ナシ</sup>本<sup>ナシ</sup>又<sup>ナシ</sup>か<sup>ナシ</sup>く<sup>ナシ</sup>とい<sup>ナシ</sup>ふ<sup>ナシ</sup>本<sup>ナシ</sup>と<sup>ナシ</sup>い<sup>ナシ</sup>ふ<sup>ナシ</sup>も<sup>ナシ</sup>あり<sup>ナシ</sup>

いづれも<sup>ナシ</sup>と<sup>ナシ</sup>考<sup>ナシ</sup>證<sup>ナシ</sup>あ<sup>ナシ</sup>り<sup>ナシ</sup>て<sup>ナシ</sup>昔<sup>ナシ</sup>葉<sup>ナシ</sup>ハ<sup>ナシ</sup>夏<sup>ナシ</sup>季<sup>ナシ</sup>之<sup>ナシ</sup>柏<sup>ナシ</sup>以<sup>ナシ</sup>  
く<sup>ナシ</sup>や<sup>ナシ</sup>と<sup>ナシ</sup>誤<sup>ナシ</sup>人<sup>ナシ</sup>何<sup>ナシ</sup>れ<sup>ナシ</sup>共<sup>ナシ</sup>是<sup>ナシ</sup>ハ<sup>ナシ</sup>か<sup>ナシ</sup>く<sup>ナシ</sup>の<sup>ナシ</sup>誤<sup>ナシ</sup>也<sup>ナシ</sup>也<sup>ナシ</sup>  
昔は地を左近馬府よまされり今もその地の利分を以てゆと  
造り土月十九日御名の夜に飲食ありてまを考の勤益云クワイの  
及<sup>ナシ</sup>語<sup>ナシ</sup>カ<sup>ナシ</sup>エ<sup>ナシ</sup>ヤ<sup>ナシ</sup>れ<sup>ナシ</sup>ハ<sup>ナシ</sup>全<sup>ナシ</sup>く<sup>ナシ</sup>記<sup>ナシ</sup>の<sup>ナシ</sup>本<sup>ナシ</sup>と<sup>ナシ</sup>捨<sup>ナシ</sup>す<sup>ナシ</sup>て<sup>ナシ</sup>檜<sup>ナシ</sup>と<sup>ナシ</sup>す<sup>ナシ</sup>か<sup>ナシ</sup>の<sup>ナシ</sup>  
柏<sup>ナシ</sup>と<sup>ナシ</sup>い<sup>ナシ</sup>ふ<sup>ナシ</sup>か<sup>ナシ</sup>の<sup>ナシ</sup>と<sup>ナシ</sup>誤<sup>ナシ</sup>え<sup>ナシ</sup>へ<sup>ナシ</sup>ら<sup>ナシ</sup>る<sup>ナシ</sup>檜<sup>ナシ</sup>ハ<sup>ナシ</sup>和<sup>ナシ</sup>名<sup>ナシ</sup>び<sup>ナシ</sup>や<sup>ナシ</sup>と<sup>ナシ</sup>あ<sup>ナシ</sup>んと  
いふ<sup>ナシ</sup>也<sup>ナシ</sup>と<sup>ナシ</sup>い<sup>ナシ</sup>ふ<sup>ナシ</sup>是<sup>ナシ</sup>に<sup>ナシ</sup>當<sup>ナシ</sup>つ<sup>ナシ</sup>て<sup>ナシ</sup>なり<sup>ナシ</sup>と<sup>ナシ</sup>い<sup>ナシ</sup>ふ<sup>ナシ</sup>は<sup>ナシ</sup>俗<sup>ナシ</sup>名<sup>ナシ</sup>也<sup>ナシ</sup>と<sup>ナシ</sup>違<sup>ナシ</sup>り  
兒<sup>ナシ</sup>手<sup>ナシ</sup>柏<sup>ナシ</sup>ハ<sup>ナシ</sup>漢<sup>ナシ</sup>名<sup>ナシ</sup>側<sup>ナシ</sup>柏<sup>ナシ</sup>之<sup>ナシ</sup>ひ<sup>ナシ</sup>の<sup>ナシ</sup>本<sup>ナシ</sup>ハ<sup>ナシ</sup>扁<sup>ナシ</sup>柏<sup>ナシ</sup>之<sup>ナシ</sup>と<sup>ナシ</sup>なり<sup>ナシ</sup>也<sup>ナシ</sup>  
檜<sup>ナシ</sup>ハ<sup>ナシ</sup>び<sup>ナシ</sup>や<sup>ナシ</sup>と<sup>ナシ</sup>あ<sup>ナシ</sup>り<sup>ナシ</sup>ひ<sup>ナシ</sup>の<sup>ナシ</sup>本<sup>ナシ</sup>れ<sup>ナシ</sup>り<sup>ナシ</sup>は<sup>ナシ</sup>何<sup>ナシ</sup>れ<sup>ナシ</sup>と<sup>ナシ</sup>誤<sup>ナシ</sup>べ<sup>ナシ</sup>  
祗<sup>ナシ</sup>注<sup>ナシ</sup>す<sup>ナシ</sup>て<sup>ナシ</sup>い<sup>ナシ</sup>ふ<sup>ナシ</sup>か<sup>ナシ</sup>の<sup>ナシ</sup>も<sup>ナシ</sup>ハ<sup>ナシ</sup>有<sup>ナシ</sup>條<sup>ナシ</sup>を<sup>ナシ</sup>包<sup>ナシ</sup>め<sup>ナシ</sup>り<sup>ナシ</sup>て<sup>ナシ</sup>は<sup>ナシ</sup>  
事<sup>ナシ</sup>ゆ<sup>ナシ</sup>て<sup>ナシ</sup>柏<sup>ナシ</sup>の<sup>ナシ</sup>字<sup>ナシ</sup>以<sup>ナシ</sup>て<sup>ナシ</sup>用<sup>ナシ</sup>ゆる<sup>ナシ</sup>は<sup>ナシ</sup>之<sup>ナシ</sup>に<sup>ナシ</sup>當<sup>ナシ</sup>ら<sup>ナシ</sup>ず<sup>ナシ</sup>ば<sup>ナシ</sup>も<sup>ナシ</sup>可<sup>ナシ</sup>し

とと混して拍の字が用ひまねりありのあり  
又と繁歌連俳ありと誤用ひるものありといふ  
といふ廣葉ありといふ漢土あり大葉標と云ふの  
水仙ノ解 倭くといふ名あり空 李杳  
哥仙 ちくくと繁葉拍の露此音 泉川  
初懐紙 繁葉標の廣葉と云うち合セ 枳風  
け繁葉拍標の廣葉と云作する皆拍標と  
他よりいふ是ハ柵の字誤用ひてより左の  
いふくつて拍の字と用ひる誤用ありと云

邦俗に流るる我物類小政又通有し意ハ  
何れよりいふかひれいといふべき也其音ハ  
甚るり哥通ハ世々の先達博識出で新して  
之改むべきなりといふべき也其音ハ  
或人のいふいふときぬむむと云ふ事之きん  
蕉翁の俳諧ハ和漢此事誤つまゝあるをて風雅  
をあるべきなりハ漢字此正しき誤尋求むべき也  
多く鳥獸よあり名を鐵の端くれなりといふ  
け道下志ざんりのハ山推濱漢此なりといふ  
信終平路此正しき事也其音ハ雅名とも云

むらん六俳のそゆびあうぎらんや又向かへると  
 么和沈カや中答カのそふかひしきむとつふの端ミカ沈  
 西へてひの末児のそかへしきむを廣カのそ等  
 ろかひしきに用ゆるその成りしむとそふ盛  
 向木曾のトキ榎トキの實ハ當トキに用ゆるトキ柄トキのまゝ同物異トキ字  
 ありや

谷別初之木多中榎の實とつふ和名どんぐり里と云  
 つふ此也は木古名ハちやそふと云又は名がとと  
 ちやそふハくぬぎと云なり木古とつふこちやと云  
 その實トキ即トキどんぐり之信好トキもそふと云んぐり里と

川木名山中へてそちの實とつふ同く木實は  
 そちの實とつふ作り

木曾の榎浮世の人好玉ミヤ産式 とも氏  
 漢名ハ榎實と云榎と敷やと二種なり  
 池田炭ハけ木とつふ榎之抄册一倉とつふ所  
 ちやと通しとせ池田炭と稱も又邦俗に  
 是ハ漢名七葉樹シチヨウとつふのあつ木曾の榎と  
 ハ別之又櫟シキとあつと河が正字也つちいと河が  
 遠トガヒありやいとハ榎なり今蘭東に

云所のらむくあう之是よ名しく挿とこちうと  
りあかり挿の字と用ゆるハ不詳別物之挿の字  
とそをと訓む正字之様とつるむとも訓ず  
くあーくぬぎよ挿の字と用ゆる非字に挿の字  
用ゆる俗字之新よ用ゆるかきよらひの挿の  
り也古名しういふ云りちかともやまらけ挿の  
同種や糸挿の字とがとも訓むるも挿  
挿二字ともよとちと訓む正字之挿挿  
挿挿一物異名なりとつるべし挿とよ  
付ハ別物之挿とよととも訓むる無しつる

むも色とりつ六色茶色のりやぐ機の実れ葉付  
の採とすく衣服と染ぬ之にすあてよあのごきと  
よ濃土とて七色色を染とらり

虫之部

問 蟋蟀ときりぐも蟬とこちうらぎ蚤はきりぐもと  
訓ず又よぐりよとらひの一物なりや

答 蟋蟀とらひのまじりふまじりくまじり云々らひの  
蚤ハ説文ハ蟋蟀とあり一物なりむらほはとも  
正字也詩經ハ蟋蟀入我牀下とらひ是之寄也  
俗も白きりぐもとけ蚤より事之寄ふあひて



邦傳も亦さういふことしうらむらむら  
け出也 存也の文も亦一け出の事よ  
そけされいふはさういふが由一古人の言と  
夕作も亦あれはさういふはさういふさういふ  
さういふさういふ一け出の事よ  
蟬や秋の聲つくとくは枝  
かゝるまきや著お進守階の上 孤屋  
けりさるびうらさういふ言作さういふの事  
さういふ古名也 傳りさういふの事

海士うさの海をよまかてて ちん氏

上ノ世二

干鯨の目くがさういふさういふ式 許六  
綿此美ふもさういふさういふ式 昌房  
是もは海をさういふさういふの吟作なり 是より考  
まハ蟬のさういふさういふの漢名竈馬のさういふ  
さういふさういふのさういふさういふの作例 懺  
さういふ論さういふさういふさういふのさういふ  
作も亦一古今集以後の奇ふさういふさういふ  
さういふさういふと萬世の蟬とさういふと真淵  
翁ハさういふと例を付さういふさういふ古訓ハさういふ  
さういふさういふ詞傳りて調さういふ和名抄ハ文字

集略云蜻蛉トビ和名古保呂木コホロギと云ふに云々あり  
蔡邕サイイ月令章句曰蟋蟀シツシツ虫名俗謂之蜻蛉トビと有  
され古より蟋蟀シツシツよふろぎの名首奉ホウと云ふ  
又和名抄云蟋蟀和名木里木里須キリギリスと云ふ蜻蛉  
と蟋蟀と二物ニモノと云ふれり也知魚チイサに於て可尋  
問ト々トきりぐトと云ふはト何ト云トの也  
やトりトきりぐトと云ふはト区ク也トと云ふと  
混マシじトてトあトまトすト  
答コタへトきりぐトと云ふ古コもト行ユクむトと云ふ  
呼コびトやトぎトと云ふ也トと云ふと云ふ

上ノ世

又トりトきりぐトと云ふはト裁キ内ナイと云ふト蠶ワラバハトきりぐトと云ふ  
糸イト國クニもトきりぐトと云ふ又トきりぐトと云ふと云ふ  
そトのトきりぐトと云ふと云ふ織オリハトきりぐトの音ネと云ふ  
啼ナくトハト歳トの音ネと云ふと云ふ古コハトはトはトはト女メと  
呼コぶトと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
促ツ織オリのトまトと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
本ホ州シュのト子シ時ジ珍チと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
と云ふ莎サ鷄キハトと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
と云ふトハトと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ  
師シ傳デンハト佛ブツと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

別名やにすしすしハ俗談話と用ゐられ  
この俗名とて厚丹と云ふ事ありと云  
まゝりとも遺つて是も多クははるまじ  
如く名をてきりくはく是の里名と白石翁  
曰く云々云々云々云々又古く云々  
と云ひ云々云々又古く云々云々  
ハ云々云々又古く云々云々  
はく云々又古く云々云々  
すり此説甚く明之又白石翁はく云々  
だつこのり云々室永年中の人あれ又昔云々の事

長門

カク物名違ふと知登し  
喜のまゝと名つけしものなるも  
はくハ雅名とてばくハ雅あり  
同遊に誰やううと云う  
と云ふ河の馬の又云々  
の事と馬車と云水馬と云  
登くやうと云ハ割と付ても  
人云われ水車と云ハ虫と云  
云々云々に續けられと云  
ハ虫ハ一名と云ハ云ハ





起りの之又子多し一と云ふ一皮に八十一子を生と云或ハ九十九子と生と云ふ一因之侍經又  
多斯の章ハ皇妃の徳を稱して作さるる  
多斯の雌雄和合と形容して子孫承ふ  
室家よと云ふ一と作さるる又本州ハ五月五日  
け虫の文合も成候て扱めぬて夫婦是紙  
侃れはくは毛媚をよて守むるもくは多事  
と裁置たり又云蟲と云ふこと訓せる人  
多りれども其詩の趨々ハ蟲と云ふ事ありて  
況し既し時珍に詠く蟲ハ此属の總名と云

上ノ世六

發明を極しいなごむつゝかぐ皆悉てを云也  
一物とす只の

問 飛蟻と書くともありと刻きて正字とや  
答 飛蟻と書ハ正字とも思はれ飛蟻の類  
ちる也一 飛蟻白蟻の兩名をありの正字  
羽蟻と書ハ俗字也甲の讀ちんハ害也  
蟻此字とありと云ふ也

俳諧多識編上畢

上ノ世七

和船